

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 4 月 30 日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K17523

研究課題名（和文）入退院する統合失調症患者に対する地域定着に向けた病院看護師による支援の構造

研究課題名（英文）Latent structure of hospital nursing support toward community settlement for patients with schizophrenia who were readmitted.

研究代表者

牧 茂義 (Maki, Shigeyoshi)

椋山女学園大学・看護学部・助教

研究者番号：90783415

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000 円

研究成果の概要（和文）：統合失調症をもつ人には、入退院を繰り返し地域生活の継続に困難をもつ人がいる。地域生活に向けた入院中の看護支援を明確にする必要がある。そこで本研究の目的は、再入院した統合失調症患者への地域定着に向けた病院看護師による支援の構造と関連要因を明らかにすることとした。調査票を、看護師1995名に配布し、823名の看護師から調査票の返信が得られた。看護師による統合失調症患者の地域定着に向けた支援は5因子から構成されていた。入退院する統合失調症患者への看護支援の関連要因には、精神科における看護の経験、認定看護師または専門看護師の資格、治療的な関心の高い病棟の風土、看護師の自己省察の高さが含まれていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

入院期間の短縮化が進んでいる精神医療の現状において、短期に効果的な看護支援を行うことは必須である。本研究は、入退院する統合失調症患者への効果的な看護支援の構造を提示した。本研究の結果は、入退院する統合失調症患者に対する支援のガイドラインを作成するための一助となる。入退院する統合失調症患者への看護支援5因子を、看護師が容易に実施できるようになれば、統合失調症患者の再入院率を下げるができる。入退院する統合失調症患者に対する看護支援の関連要因が明らかになることは、看護支援能力を高める教育手法の開発につながる。本研究は、看護師の自己省察を深めるトレーニングの必要性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Some patients with schizophrenia are hospitalized repeatedly. They have significant impairments that adversely affect their ability to live in their communities. It is necessary to examine the nursing care aiming at community settlement for patients with schizophrenia. The aims of this study were to elucidate the latent structure of the nursing care aiming at community settlement for patients with schizophrenia and examine the factors that were associated with the aforementioned nursing care. We distributed the original questionnaires to 1,995 nurses. Data were collected from 823 nurses. The nursing care aiming at community settlement for patients with schizophrenia was found to consist of five factors. The factors that were associated with the nursing care were “experience in psychiatry,” “license of certified nurse/certified nurse specialist,” “ward climate with high therapeutic interest,” and “self-reflection of nurses.”

研究分野：精神看護学

キーワード：統合失調症 再入院 地域移行 病院看護師 看護支援 地域定着 病棟風土 省察

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

精神保健システムは施設中心から地域を基盤とする支援へと移行している。2004年、厚生労働省は『精神保健福祉の改革ビジョン』を公表し、地域の関係者の連携の下、統合失調症をはじめとする入院患者の減少及び地域生活への移行に向けた支援並びに地域生活を継続するための支援を推進することを目指してきた。そのような取り組みにより、精神病床の平均在院日数は、1994年468床から2014年281床へ20年間に約180日減少している。しかし、この改革には依然課題が多い。入退院を繰り返し、地域生活を継続できない患者の状況が指摘され(駒井, 2008)、回復の遅延、障害の固定化、就業の困難、家族関係の破綻を招くとも言われ(遠田, 2014)、精神障がい者の地域移行の大きな妨げになる可能性がある。

再入院した統合失調症患者に対する看護支援の実態に関して、地域資源との連携やサポートネットワークへの介入が行われていないことが報告されている(宇佐美ら, 2003)。さらに、退院後の安心できる居場所探しと社会資源活用の準備、症状管理、セルフケア獲得の支援は実施されているが、入院の仕方、地域での生活の仕方、患者の疾患、再入院の理由などを理解した個別的な看護ケアは十分には実施されていないことが明らかになっている(宇佐美ら, 2014)。3か月以内に再入院した統合失調症患者への中堅・熟練病院看護師の支援は5現象からなることが明らかにされている(牧ら, 2018)。しかし、牧ら(2018)の研究は、中堅・熟練病院看護師17名へのインタビューを分析した質的研究であり、一般化可能性に限界がある。再入院した統合失調症患者の地域定着に向けた病棟看護師の看護支援に関する因子構造や、その看護支援の関連要因を量的に明らかにした研究はない。

限られた在院日数のなか、患者の地域生活継続を可能にする効果的な支援を行うためには、再入院した統合失調症患者に対する病院看護師による支援のあり方や支援の因子構造、支援の関連要因を解明する必要がある(牧ら, 2017)。本研究では、再入院した統合失調症患者に対する看護支援の関連要因として、看護師の私的自己意識としての省察、精神科病棟風土、看護師が患者にもつスティグマ、看護師の精神科病院勤務経験年数・精神科訪問看護の経験・精神科ケアの経験を想定した。

再入院した統合失調症患者に対する看護支援の構造が明らかになれば、新人看護師であろうと熟練看護師であろうと、再入院した統合失調症患者への看護支援の方向性を容易に導くことができるようになるであろう。さらに再入院した統合失調症患者に対する看護支援の構造が明らかになることによって、再入院した統合失調症患者に対する看護支援のガイドライン作成の一助になるであろう。再入院した統合失調症患者に対する看護支援の関連要因が明らかになれば、看護師の支援能力向上のためのプログラム開発に向けた示唆を得ることができるであろう。

### 2. 研究の目的

再入院した統合失調症患者に対する地域定着に向けた看護支援の構造と、その看護支援の関連要因を明らかにする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』に関する質問項目の作成

先行研究(牧ら, 2018)を参考にして43項目からなる質問項目を作成した。牧ら(2018)の研究は、3か月以内に再入院した統合失調症患者の地域生活継続を目指した病院勤務の中堅・熟練看護師による看護支援を明らかにしたものである。この研究は、中堅または熟練の精神科看護師17名のインタビューデータを質的に分析したものである。

質問項目の内容妥当性確保に努めるために、4名の研究者(1名の精神看護学領域の研究者、1名の精神科医である研究者、2名の調査研究の経験を豊富に持つ研究者)から意見を得て質問項目を追加修正した。さらに、質問項目の表面妥当性確保に努めるために、5名(2名の大学院生、1名の大学教員、2名の精神科看護師)の意見を得て質問項目を修正した。

#### (2) 『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の構造とその関連要因

日本全国の精神病床の割合が60%以上の病院256施設に研究協力の依頼をした。256施設の内訳は、公的医療機関または公益法人の病院が全数128施設と、医療法人の病院1143施設のうち無作為に抽出した128施設である。256施設のうち、承諾が得られた40施設を調査対象施設とした。40施設の内訳は表1に示す。

調査対象施設の精神科病棟で勤務する看護師1995名を調査対象者とした。調査項目は、看護師の属性、看護師が勤務する病院・病棟の属性、『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の質問43項目、エッセン病棟風土評価スキーマ(EssenCES)、Rumination-Reflection Questionnaire(RRQ)の下位尺度『省察』、Link スティグマ尺度、看護実践の卓越性自己評価尺度—病棟看護師用—である。

EssenCESは、3つの下位尺度「治療的な関心(Therapeutic hold)」「安全性への実感(Experienced safety)」「患者間の仲間意識・相互サポート(Patients' cohesion and

	承諾数	依頼数	
公的医療機関	19	58	32.8%
公益法人	6	70	8.6%
医療法人	15	128	15.6%
全体	40	256	1.7%

表1 研究協力が得られた施設

mutual support)」を有する 17 項目からなる尺度である。得点が高いほど、回答者が社会的にポジティブな風土であると評価していることを示す（野田ら，2014）。

RRQ は『反芻』と『省察』の下位尺度を含んでいる。合計点が高いほど、回答者は自分自身について省察する傾向が高いことを示す（高野ら，2008）。本研究では、下位尺度『省察』の 12 項目を使用した。

Link スティグマ尺度は、多くの人々が精神科治療を受けたことのある人を差別する態度をどの程度もっていると思うか、を質問することにより、その人のもつスティグマの程度を測定する。本尺度は、12 項目からなる尺度である（下津ら，2015）。本研究では、75 パーセンタイル値をカットオフ値として、対象者を高値群と低値群の 2 群に分類した。

看護実践の卓越性自己評価尺度 病棟看護師用 は、7 つの下位尺度を含む 35 項目の尺度で、得点が高い程、看護師が自分の看護実践をより高く評価していることを示す（亀岡，2015）。

分析には、統計解析ソフト SPSS Ver.25 を使用した。項目分析と探索的因子分析によって、『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の構造を検討した。『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の Multitrait Scaling 分析から、各項目の収束的・弁別的妥当性を検討した。『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』と、看護実践の卓越性自己評価尺度—病棟看護師用—との相関から併存的妥当性を検討した。『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』総計、および各因子に関する Cronbach の  $\alpha$  係数を算出し、内的一貫性の検討を行った。さらに、『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の総計および因子を従属変数とし、重回帰分析を行い、関連要因を検討した。

#### 4. 研究成果

看護師 823 名より回答が得られ(回収率 41.3%)、有効回答 724 を分析した。看護師が勤務する病院の設置主体は、公的病院 366 名 (50.6%)、公益法人 27 名(3.7%)、医療法人 331 名 (45.7%)で、看護師の精神科経験年数の平均は  $11.7 \pm 8.7$  年であった。研究対象者の概要を表 2 に示す。

項目分析および探索的因子分析の結果から、『再入院した統合失調症患者に対する地域定着を目指した看護支援』は 37 項目、5 因子と構造からなることが明らかになった。各因子の命名は、以下の通りである。

- (1) 『認知とセルフケアへの支援』
- (2) 『再入院の課題の把握』
- (3) 『退院後の生活に関わる連携体制の整備』
- (4) 『退院後の生活の目標の共有』
- (5) 『休養の場の提供』

『再入院した統合失調症患者に対する地域定着を目指した看護支援』における Multitrait Scaling 分析において、すべての項目の収束的・弁別的妥当性が確認された。『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の各因子における合計得点と、看護実践の卓越性自己評価尺度—病棟看護師用—総計との相関は、 $0.414 \sim 0.547$  で、併存的妥当性が確認された。

『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』全体、および各因子における Cronbach の  $\alpha$  係数は、 $0.810 \sim 0.959$  で、高い内的一貫性が確認された。

『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』総計を従属変数とした重回帰分析では、公的医療機関での勤務 ( $\beta = 0.090$ )、精神科経験 5 ~ 14 年 ( $\beta = 0.106$ )、精神科経験 15 年以上 ( $\beta = 0.181$ )、退院前カンファレンスへの家族の参加 ( $\beta = 0.104$ )、認定・専門看護師の資格 ( $\beta = 0.081$ )、訪問看護の経験 ( $\beta = 0.090$ )、大学院(修士)修了 ( $\beta = 0.076$ )、EssenCES における『治療的な関心(Therapeutic hold)』 ( $\beta = 0.326$ )、省察 ( $\beta = 0.182$ )、Link スティグマ尺度高値群 ( $\beta = 0.079$ ) が有意に関連していた。

『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指

看護師			
	n	%	mean SD
<b>性別</b>			
男性	324	44.8	
女性	400	55.2	
<b>精神科勤務経験 (年)</b>			
<5	191	26.4	11.7 8.7
5-14	323	44.6	
≥15	210	29.0	
<b>CN/CNS の資格</b>			
なし	698	96.4	
あり	26	3.6	
<b>訪問看護の経験</b>			
なし	555	76.7	
あり	169	23.3	
<b>外来勤務経験</b>			
なし	652	90.1	
あり	72	9.9	
<b>精神科以外の診療科の経験</b>			
なし	264	36.5	
あり	460	63.5	
<b>精神科以外の診療科の経験 (年)</b>			
			7.6 7.1
<b>教育背景</b>			
専門・高校	598	82.6	
大学	112	15.5	
大学院 (修士)	14	1.9	
<b>勤務する病院の設置主体</b>			
公的病院	366	50.6	
公益法人	27	3.7	
医療法人	331	45.7	
<b>勤務する病棟の閉鎖・開放病棟の別</b>			
閉鎖病棟	610	84.3	
開放病棟	56	7.7	
閉鎖 + 開放	58	8.0	
<b>勤務する病棟の種別</b>			
救急/急性期	299	41.3	
慢性期/回復期	336	46.4	
その他	89	12.3	

SD: 標準偏差

表 2 研究対象者の概要

した看護支援』は5因子で構成されることと、その妥当性が確認された。『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の項目は、再入院した統合失調症患者に対する看護実践のガイドとなるであろう。さらに『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』の項目は、看護師の実践能力開発に向けたツールになる可能性がある。再入院した統合失調症患者の地域生活の継続を目指した病院における看護支援では、『認知とセルフケアへの支援』、『再入院の課題の把握』、『退院後の生活に関わる連携体制の整備』、『退院後の生活の目標の共有』、『休養の場の提供』の5点を踏まえることが重要である。

『再入院した統合失調症患者の地域定着を目指した看護支援』に関わる看護師の能力を開発するためには、以下の2点が必要である。1点目は、組織として治療的関心の高い病棟風土を育むといった環境要因に働きかけることである。2点目は、看護師が自らの実践を振り返り、省察するためのトレーニング方法を検討することである。

#### <引用文献>

駒井博志 (2008). 精神科病院への再入院を繰り返す人の現況と生活ニーズについて. 大阪体育大学健康福祉学部研究紀要, 5, 85-114

遠田大輔, 中西清晃, 杉角俊信, 他 (2014). 精神科救急病棟入院患者の再入院に関連する要因の検討. 精神科救急, 17, 123-130

宇佐美しおり, 岡田俊 (2003). 精神障害者の地域生活を維持・促進させる急性期治療病棟における看護ケア急性期ケアプロトコル開発をめざして. 看護研究, 36(6), 493-503

宇佐美しおり, 中山洋子, 野末聖香, 他 (2014). 再入院予防を目的とした精神障害者への看護ケアの実態. 日本精神保健看護学会誌, 23 (1), 70-80

牧茂義, 安藤詳子 (2017). 精神科看護師の臨床判断に関する研究の動向と課題 —国内外の文献レビュー—. 相山女学園大学看護学研究, 9, 33-42

牧茂義, 永井邦芳, 安藤詳子 (2018). 3 ヶ月以内に再入院した統合失調症患者に対する地域定着に向けた中堅・熟練病院看護師の支援プロセス. 日本看護研究学会雑誌, 41(4), 713-722. doi:10.15065/jjsnr.20180308015

野田寿恵, 佐藤真希子, 杉山直也, 吉浜文洋, 伊藤弘人 (2014). 患者および看護師が評価する精神科病棟の風土 エッセン精神科病棟風土評価スキーマ日本語版(EssenCES-JPN)を用いた検討. 精神医学, 56(8), 715-722

高野慶輔, 丹野義彦 (2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み, パーソナリティ研究, 16(2), 259-261

下津咲江, 坂本真土. (2015). 精神障害に対する態度, 偏見, Link ステイグマ尺度. 臨床精神医学 44 増刊号, 93-100.

亀岡智美, 舟島なをみ (2015). 看護実践の卓越性に関係する特性の探索 - 臨床経験 5 年以上の看護師に焦点を当てて -. 国立看護大学校研究紀要, 14(1), 1-10

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 牧 茂義、永井 邦芳、安藤 詳子	4. 巻 41(4)
2. 論文標題 3か月以内に再入院した統合失調症患者に対する地域定着に向けた中堅・熟練病院看護師の支援プロセス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本看護研究学会雑誌	6. 最初と最後の頁 713～722
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15065/jjsnr.20180308015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Shigeyoshi Maki, Shoko Ando
2. 発表標題 Related factors of the “Nursing Protocol of Community Settlement for people with schizophrenia” in Japan
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 牧 茂義、永井邦芳、安藤詳子
2. 発表標題 再入院する統合失調症患者に対する看護支援プロトコルの検討
3. 学会等名 第39回 日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 牧 茂義、永井 邦芳
2. 発表標題 精神科病棟勤務の看護師における「省察」と看護実践の卓越性の関連
3. 学会等名 日本精神保健看護学会 第29回学術集会・総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 牧 茂義, 永井 邦芳, 安藤詳子
2. 発表標題 精神科病棟で勤務する看護師による病棟風土の評価とスティグマとの関連
3. 学会等名 日本看護研究学会 第45回学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	安藤 詳子 (Ando Shoko) (60212669)	名古屋大学・医学系研究科(保健)・教授  (13901)	
連携研究者	永井 邦芳 (Nagai Kuniyoshi) (70402625)	名古屋学芸大学・看護学部・教授  (33939)	
連携研究者	玉腰 浩司 (Tamakoshi Kouji) (30262900)	名古屋大学・医学系研究科(保健)・教授  (13901)	